

2024年8月18日 青戸教会 「あなたを罪に定めない」  
聖書 出エジプト記34章4〜9節、ヨハネ福音書8章3〜11節

高橋克樹牧師

キリスト教信仰の核心部分を表した聖書箇所はいろいろありますが、本日の箇所もまた、その代表的な一つであると言えます。主イエスがエルサレム神殿の境内で人々に教えられていました。そこに律法学者やファリサイ派の人々が姦通の現場で取り押さえられた女性を連れてやってきました。そして、モーセ律法に従って、この女性を石で打ち殺してしまうことでもいいでしょう？ とイエスを試すように言ってきたのです。もし、イエスが罪あるこの女性を赦すと言えば、イエスはモーセ律法をないがしろにすることになり、イエスを捕える口実を得ることになります。おそらく、そのような目論見で律法学者やファリサイ派の人々はイエスの前にこの女性を引き出したのでしょう。

すると、イエスはかがみこんで、指で地面に何か書き始められたのです。それでも、律法学者たちがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして「あなたたちの中で罪を犯したことにない者が、まず、この女に石を投げなさい」と言ったのです。イエスはそこにいた人たち全員に自分自身の歩みを振り返って、犯した罪に向き合うことを促したのです。すると、この言葉を聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と立ち去ってしまい、最後にはイエスとその女性だけになってしまったのです。この女性を石で打ち殺す資格がある者は人間の中には誰もいないということが明らかになったのです。

また、年長者から始まって立ち去っていったということは、人間は生きている時間が長ければ長いほど、罪を重ねているということを表しています。そして、誰もが立ち去ったということは、人間は誰一人として罪を犯さずに生きていくことは無理だということです。にもかかわらず、律法学者とファリサイ派の人々は姦淫の現場を取り押さえて、この女性を捕まえて、姦淫の罪で石打ちの刑に処することが正しいと思ひ込んで、それでもってイエスを陥れようとしたのです。

けれども、ここには一つの陥穽が見て取れます。それは、姦淫の罪はこの女性一人で成り立つわけではないということです。つまり、その現場にいたはずの男性の姿はどこにも出てきていないのです。男性は咎められていないのです。律法学者やファリサイ派の人々は男性です。この男性たちが姦淫の現場にいた男性のことは見逃していたことが容易に想像できるのです。モーセ律法の解釈においても、男性の優位性がここに登場する律法学者やファリサイ派の人たちには表されているのです。この話には、当時の男性優位のユダヤ社会によってかたち作られたジェンダーの問題も見え隠れしているのです。売春の問題でも、以前は売春をした女性のことだけが問題とされる傾向がありました。現在では買春をする男性の問題でもあるというのが問題とされる。考える上で基本的な姿勢に社会が立つようになっていっています。少なくとも、売春の問題を女性の側だけの問題とみなす論説は非常に少なくなっています。けれども、いま

だに根強く女性の倫理問題に矮小化しようとする男性の人たちは依然として存在しているのが現実です。

いずれにしても、姦淫の現場を捉えられた女性に対する主イエスの対応の仕方は、現代のジェンダーの視点から見ても男性優位の視点が皆無だということは、ある意味不思議なことです。イエス個人に女性蔑視の視点がなくても、福音書を書いているのはおそらく男性です。勢い、そこには男性優位の視点が入り込む余地は限りなく多くあったはずですが、にもかかわらず、この姦淫の女性の物語に対するイエスの対応には男性優位のジェンダー課題がないのです。

イエスとその女性しか残っていない状況になったところで、主イエスは女性に言います。「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか」。それに対して女性が「主よ、だれも」と言うと、イエスは「わたしもあなたを罪に定めません。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない」と言って、12節にあるように「私は世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」と言って、この女性に生きる勇気を与えたのでした。

私たち人間にとって、罪とはゴキブリホイホイに捕まって身動きが取れなくなったゴキブリになったようなものです。ですから、私たちは自分の罪をとらえられたら、逃げ出すことができなくなります。そして、死ぬのをただ待つだけの状態になります。けれども、主イエスがどのような状況にあっても私たち人間を罪に定めないと赦してくださいなのです。

それは罪の内に死んでいた私たちを罪から解放して、復活の命によって新しく生きる道筋を示してくださいからです。私たち人間は誰一人の例外もなく、罪の奴隷になって罪に仕えて生きるしかなかったのですが、その罪の鎖につながれて生きるしかなかった私たちを、主イエスはその罪の鎖を十字架の血によって打ち砕き、贖ってください、罪から解放してくださいなのです。罪赦された者は、12節にあるように、世の光であるイエスに従って生きていくなかで、命の光を持つような存在になるということです。命の光を持つ存在になるといことは、罪の鎖から解放されたことで、他者に対して命の光を放つ存在になって、罪の中を歩く人間を主イエスの赦しの道へと招く存在になっていくということです。自分だけが救われる利己的な救いの道を歩むのではなく、主イエスの十字架の血によって贖われた恵みを多くの人たちと分かち合う道を歩む者同士になっていくということです。

「わたしもあなたを罪に定めません」（11節）と主イエスはこの女性に言われました。 「わたしも」と言うのは、主イエスも立ち去った律法学者やファリサイ派の男性たちと同じく、わたしもあなたを罪に定めませんと言ったのですが、この言葉は、わたしも憐れみ深い神と共に、あなたを罪に定めませんと言ったのです。主イエスの父なる神は、罪に捕らわれて生きている人間の弱さを担って下さる根源的な罪の赦しの言葉をこの女性に告げたのです。